

伝えたい、伝統芸能の心

高森町伝統芸能連絡協議会会長 本田 研一

色見から町道をのぼり、上色見に至る道すがら小倉原があります。

ここ小倉原の地名は、北九州小倉にその源を発し、細川藩政の時代に、小倉よりつかわけられたといい、その一族は長らく番所の役人でありました。

小倉原は町道に沿って東西に位置し、ほぼ中心地点に番所があり、そこから南北にそって住居があります。北側には天満宮があり、その鳥居にある設立年号は読み取れなくなっています。

この鳥居の作りは、継ぎ手に特徴があり、素朴にも見えかつ近代的な工法を手作りでもってなしたもので、ただただ感服致します。この手法による鳥居は少なく、同じつくりの物を探す事によって、その系図なるものが解かるかも知れません。

ここはやがて前原を経て日の尾峠を超え、阿蘇一の宮へ至る重要なルートであり、南側は村山をぬけ高

森に至り、そして俵山等を越える交流の要でありました。

小倉原は小さな集落であっても、重要な役割を果たしてきました。

現在の町道が竹田往還跡であり、小倉原の中心地点に番所があり、その並びに、明治二十二年に発令され



▲旧色見村役場が建てられました（色見・小倉原）

た町村法により旧色見村が設立されます。

旧色見村の初期役場は、小倉原の民家に仮事務所的装いをもって設立されます。その後現在の色見保育園の場所に役場が建てられました。

現在は植林され望めなくなった色見保育園前の高台。ここに大きな円墳があります。

その円墳の下手に村山へ抜ける道があり、日の尾峠を往来する旅人の目印でありました。

色見・上色見のほぼ中央に位置する小倉原は、阿蘇の山々を瀬に二本の河川が流れ下り、しかしいずれも水なし川です。

南北に流れ落ちる川は前原を源とし、梅雨時の大雨時には、度々氾濫しました。もう一本の河川は東西に流れ、上色見洗川をその源流とし、やはり大雨時には氾濫しました。その二本の河川が合流し一本になり、やがて白川へと至ります。

その河川上手に井戸があり、この地区では数少ない飲料水でした。

小倉原は、一の宮そして大分県竹田を結ぶ番所、交通の要でありました。

その番所跡と言われる地点は、高森から村山を経て、その村山の牧場入口を進行方向左手に下りて行き、そして二本の河川を横切り上り詰めるところにありました。又、現町道

は竹田往還道であり、当時は細川藩と言うより、豊後竹田の方がより強き繋がりをもって接していました。

上色見の大半の人達は、開発を目的として豊後の国より移り住みました。しかし、江戸時代に上色見の農民が「百姓逃散」といい、村民全員が集団で他領等へ逃亡します。

享保の頃から肥後、日向、豊後の国境地帯に頻発していた不穏な事態を藩当局は最も警戒していたのに、なぜ起きたのでしょうか。

上色見には未墾の原野が多く、豊後から百姓を入れて開拓に当たらせたとやうであります。農民はその過酷な労働に堪えかねて、故地の豊後へ逃散したのでしょうか。

南北交流の要として、その役割を果たした小倉原。古代から人々が住み、そして残した円墳。両色見をまとめる。それだけでも大変な事業だったでしょう。